

教えて センセイ

岡本 健先生に聞く〈ゾンビの話〉



ゾンビは
日常を非日常に変えてしまう存在であり、
人々の想像を超える自由さが魅力です

世界中で人気のゾンビ・コンテンツ、大学で学ぶわけとは

ゾンビは、一般に死体がよみがえって動くもので、ゾンビ映画はグロテスクなものも多いですから、顔をしかめる方もおられるかもしれませんが。私は大学3年生のとき、無性にゾンビが気になり……というか好きになり、学生時代の暇にあかせてゾンビ映画を大量に視聴しました。その後、大学教員になってからゾンビ研究の成果を著書『ゾンビ学』(2017年)および『大学で学ぶゾンビ学』(2020年)にまとめ、現在、近畿大学で教鞭をとっています。その部分だけ聞くと、「大学でゾンビを教える時代ですか!」とおもしろがられますが、本質はそこではありません。「メディア文化論」という授業で、媒体(テレビ、新聞、インターネット)やコンテンツ(映像、文

章)をどのように分析すればいいのかを考える一例としてゾンビを用いています。なぜかという点、たいいていの学生はゾンビについてうっすら知っています。背景などはわかっておらず、「そういうものだろう」という認識しかありません。これはしめたもので、ゾンビのようなものでも丁寧に探っていくと歴史性があり、作品同士の関連性や現実社会との相互作用が垣間見える例として最適なのです。多くの人に価値が無いと思われているものでも、好奇心をもって考察していくと学問的にももしろい要素が見えてくる。それを学んでもらうきっかけがゾンビです。

今では情報過多の時代のせい、人々の興味関心はまちまち。「多くの人が、一人のアイドルに夢中」という時代ではなくなりました。ある意味、好都合ですね。ゾンビのように、多くの人がそれに詳しくない、学問になりそ

うもない「そういうもの」狭い興味が見つかりやすいですから。入り口はなんでもいいです。自分でテーマを決め、研究方法を考え、結果をもとに考察すること。好きなものを探究していくと、その周りに知識や情報がくっついて、狭かった興味の世界が広がっていきます。「もの見方」がわかれば、自分を取り巻く社会に関心をもち、自分の頭で考えることができる。そのような生き方をめざしてほしいのです。もちろん授業ではゾンビの魅力も熱く語ります。好きなものに向き合う姿勢も学んでもらいたいですね。そもそもゾンビは、カリブ海に浮かぶハイチの民間信仰、ヴードゥー教の呪術が起源といわれています。ゾンビパウダーと呼ばれる粉末で、死体をよみがえらせて操るといいます。このことをジャーナリストのウィリアム・シーブルックが『マジック・アイランド(魔法の島)』(1929年)という本に記し、英語圏で知られるようになりました。1932年に映画化された『ホワイトゾンビ』(1932年)はハリウッドでゾンビが描かれた最初の作品といわれています。

初期のゾンビ映画ではゾンビは人に襲い掛かって噛みつきとうしません。不可思議な習俗や、呪術の恐怖が描かれていたが、その後、設定が変わっていきます。ハイチの呪術がエジプトの呪いになったり、科学的な力で死体を蘇らせたり。遠く離れた場所だったのが西欧文明の都会に近づいてきたりします。その後、ジョージ・A・ロメロ監督の『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』(1968年)が公開されます。ゾンビが人を襲い、噛まれた人もまたゾンビになるという設定は、クリエイターに大きな影響を与えました。人に噛みつき、襲いかかるゾンビが70、80年代にかけて多数登場し、90年代はいったん下火になりますが、2000年代に勢いを取り戻します。その理由の一つは人気ゲームを実写化した『バイオハザード』(2002年)の大ヒットで、再びゾンビ映画が量産されるようになったのです。『バイオハザード』はウイルス感染でゾンビが増殖するもので、この設定が実感として受容されやすかったのでしょう。

ゾンビとの共存は他者との関係性を考える「教材」かもしれない

汚れた服装と血糊、よろよろと動けば、ゾンビらしく見えます。低予算で映画やTVドラマを作ることができるのもゾンビものの利点です。「これぞ、ゾンビ」という強固なスタイルがなく、アレンジもしやすい。たとえば

ゾンビは死体なのでノロノロ動くのが定番でしたが、全速力で走るゾンビがブレイクスルーしました。「それはゾンビではない」と一部ブーイングがありました。特性のひとつとして定着しました。最近では意識のあるゾンビが登場する作品も珍しくありません。このようにクリエイターの独創性を発揮しやすいという意味でも、ゾンビは使いやすいのです。

とはいえ、ゾンビ映画はグロテスクだからちよつと……と敬遠する人もいます。実は、表面的な表現にとどまらず、作品を構造的に捉えること、そこからメッセージを読み取ることが出来ます。ゾンビ映画は玉石混交ですが(それがまた良い!)、ゾンビを他者の比喩と考えると、人間が他者とのような関係性を取り結ぶのか、という現代的な問題を読み解くことができます。人とゾンビの関係性を描写する作品は、どういう結末になるのか、がミソです。ゾンビを悪としてやっつけてしまうのか、人間が全部やられてしまうのか。両者が共存する場合、どのような方法を示すのか。これは自分たちとは異なる他者とう向き合うのかという話につながります。

身近な設定におきかえるとうです。もし、家族の誰かが過激な思想や価値観に染まり、攻撃的になってしまったらどうしますか。安心できる存在の家族がコミュニケーションのとれない他者になってしまう。親しかった人がすっかり変わり、自分も変わってしまうかもしれない。これはかなりの恐怖で、ゾンビに感じる恐怖もそこにあると思います。サメや宇宙怪物ではなく、人間と地続きにあるゾンビは自分の姿を浮き彫りにする鏡のような存在ともいえます。ゾンビの存在によって変容してしまった世界で、どのようにふるまえばよいのか、登場人物たちの様子を見て考える。そのような視点でゾンビ映画を観ると、思ってもよらなかった生きるヒントが得られるかもしれません。大学で学ぶ「ゾンビ学」とは、まさにそういう視点です。



ゾンビメイクをした岡本先生。このノリのよさが学生たちに人気。VTuberのゾンビ先生としてYouTubeチャンネルで配信中

岡本先生の著書『大学で学ぶゾンビ学』は、センシティブに扱われるのか! 扶桑社